

F-SOAIPとは、多職種協働によるマイクロ・メゾ・マクロレベルの実践過程において、生活モデルの視点から、当事者ニーズや観察、支援の根拠、働きかけと当事者の反応等を「F（タイトル）」「S（利用者等の言葉）」「O（観察・多職種情報等）」「A（考えたこと）」「I（対応したこと）」「P（予定）」の項目で可視化し、P D C Aサイクルに多面的効果を生むリフレクティブな経過記録の方法。

今回は、福祉サービス第三者評価における評価者の立場から、F-SOAIPを報告書のベースとして活用することの有効性について紹介します。

福祉サービス第三者評価におけるF-SOAIP活用

一般社団法人埼玉県ケアマネジャー協会 会長 日本介護情報機構株式会社 評価調査者 杉田まどか

はじめに

福祉サービス第三者評価の目的は、「第三者の目から見た評価結果を幅広く利用者や事業者公表することにより、利用者に対する情報提供を行うとともに、サービスの質の向上に向けた事業者の取り組みを促すことで、利用者本位の福祉の実現を目指すもの」とされ、東京都福祉サービス評価推進機構が認証した評価機関は、「事業所の職員の自己評価や利用者アンケート調査を行った上で、サービス現場の確認や職員へのヒアリングを通して、サービス内容や組織運営について総合的に分析し、評価を行う」としています¹⁾。

私は、かねてから介護支援専門員として、また福祉サービス第三者評価の評価調査員として、さらに東京都足立区福祉事務所介護扶助適正化管理専門員としても、F-SOAIPの有用性に着目し、F-SOAIPに関する実践報告の執筆やF-SOAIP研修の講師活動にも携わってきました²⁾。

F-SOAIP活用を方針とする評価機関

以前、私が評価調査者として所属していた評価機関である一般社団法人サービス管理者協会では、HPで評価に対する考え方として、評価のための

図1 F-SOAIPを用いた事業所訪問時のメモ

- F (Focus: 焦点)
介護の手引書の活用でサービスの基本事項や手順の明確化
- S (Subjective: 主観的情報)
職員が業務を適切に遂行できるよう、勤務実態に応じた手順書を作成する必要がある。
- O (Objective: 客観的情報)
・手順書は、職員の勤務実態に合わせ、「責任番」「夜勤」「A番」「C番」などと区分
・時間ごとに職員が何をするのが手順として記載され、漏れなく介護を提供できるよう工夫されている。
- A (Assessment: 評価・分析)
手順が明確に示されることで、業務の抜けや漏れの防止、均一なケアの提供が可能。
- I (Intervention: 介入・対応)
ケアの内容だけでなく、ケアが必要な利用者についても明記されており、適切な支援を行えるようになっている。
- P (Plan: 計画)
今後も職員の勤務実態に合わせた手順書の見直しを行い、サービスの質の向上に努める。

「記録時間を短縮し、パッと見て内容が理解できるよう生活支援記録法 F-SOAIPを用い、情報を整理し事業者へフィードバックすることを目指しています。専門職として実践過程や思考過程を可視化でき、事業者としてP D C Aサイクルへ多面的な効果を生むことが期待できると考えており、事業者が受審にかかる時間的負担を減らし業務の効率化を目指しています」と謳っていました³⁾。

事業所訪問時のメモをF-SOAIPで

評価のためには、2人以上のメンバーでチームを組み事業所を訪問します。訪問時には、事業者の多くの資料を共通評価項目に紐付けながら実施状況を確認するため、必要な情報をメモしてい

ますが、そのメモの整理にF-SOAIPを活用しています。その一例が図1です。

評価結果は、最終的には事業者へ報告するための「フィードバックレポート」と、当居と福祉サービス評価推進機構に提出する「福祉サービス第三者評価結果報告書」に反映させることとなります⁴⁾。

このうち、「福祉サービス第三者評価結果報告書」については、様式が定められていますので、そこでF-SOAIPを活用することはできません。しかし、「フィードバックレポート」については、評価機関が独自の様式を定めることができるようになっています。そこで、私が以前所属していた評価機関が掲げていた目標のように、「フィードバックレポート」のなかで、図1のような評価結果を